

筒井淳也著『仕事と家族 日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』中公新書（2015年）

「アメリカとスウェーデン、正反対に見える国で女性が活躍しているのはなぜ?」。本書の帯にあるこの一文に惹かれ、本書を手にとった。筆者が本書で立てている問いは極めてシンプルである。アメリカは経済活動における自由化を進めた「小さな政府」を代表する国であり、スウェーデンは福祉施策の充実を進めた「大きな政府」を代表する国である。政府の大小という尺度での両極にある両国家において女性の就業率、そして出生率も相対的に高い。他方、そのいずれにもあてはまらない日本やドイツでは女性の就業率、そして出生率も相対的に低い。なぜ、政府の大小と女性の就業率などとは非線形の関係にあるのだろうか。この問いを端緒として深められる本書での論考は、仕事と家庭の両立に悩む我々の生活、そして、少子高齢化、労働者不足という難題を抱える現代日本社会の諸課題の解決策をさぐるための議論の前提を私たちに提供するものとなっている。

本書の冒頭、「第1章 日本は今どこにいるか?」は、女性就業の歴史的な推移、その推移を含む日本と他国との比較から、日本の仕事、家族の特徴を浮かび上がらせることからはじめられる。

歴史的な推移という点では、筆者は1970年代における工業社会からポスト工業社会への転換期を女性就業をめぐるメルクマールとして注目する。すなわち、1970年代までの工業社会においては、経済成長とともに労働者階級の生活は向上し、先進国では女性の専業主婦化が進行する。その結果、国による時期の違い、もしくは、国内の社会階層間の違いはあるものの、総じて性別分業が進み、「男性稼ぎ手」社会が確立していく。そして、この時期において、女性就業率の上昇は、子どもの出生率にネガティブに影響していたことが示されている。

しかし、1970年代以降のポスト工業社会となると、育児や介護などのケアを含むサービス業が拡大し、そのなかで女性の就業は男女平等の社会運動とは別の文脈で拡大していく。ここで筆者は、女性就業をめぐる各国の対応が分かれたことについて、エスピン＝アンデルセンの示した3つの世界論を土台としながら展開していく。

小さな政府を代表するアメリカでは、自由で男女が平等な社会を実現していくなかで、女性が男性と同様のキャリアを積むことを可能とする社会が作り出される。しかし、そこでは移民をはじめとした低賃金のベビーシッターの存在が条件として欠かせなかった。女性の就業率は上昇したものの、格差という問題を抱え込むこととなった。

大きな政府を代表するスウェーデンでは、福祉施策の充実とともに公的部門におけるケア労働のニーズが高まる。その需要を満たしたのが女性であった。しかし、そこでは相対的に賃金の低い公的部門に女性の就業先が偏るといふ、仕事の性別分業という問題を抱え込むこととなった。

しかし、両社会とも1970年代以降の女性就業の拡大は出生率の上昇に結びついている。他方、女性就業が拡大しても出生率が低迷したのが、その両社会に含まれないドイツや日本である。1970年代以降の不況という環境下で、ドイツでは高年齢者の早期退職（引退）制度に象徴的であるように“雇用の<縮小>”が進められた。また、日本でも第三号被保険者制度など女性の就業を抑制するような施策の制度化が続く。

日本では結果として女性の就業拡大は非正規雇用という形で実現され、他方、男性の仕事では（企業にとって）柔軟な性格をもつ長時間労働が続くこととなった。そして、日本において出生率が伸び悩んだ要因については、経済要因、カップルの間の価値観など、家族社会学的な考察も深められる。

筆者は労働者不足が顕在化する日本社会において、女性就業の拡大を必要条件として位置づけている。同時に、女性就業が拡大し、出生率も高いアメリカ、スウェーデンはともに課題を抱えていることも指摘する。ベストな解が示されない本書の議論の展開にはもどかしさを感じる。しかし、今後の方向性についての論議を深めるための視点がオープンエンドで示されている。それが本書の魅力である。（小熊 信）